

大友氏の歴代墳墓を巡る (五)

六代 大友貞宗

古藤田

太

(会員・弥生町江良)

第六代 大友貞宗

法名

顯孝寺殿前江州刺史直菴具簡大禪定門

(松野家々伝 大友系図)

元弘三年十二月三日 卒

墓所 (正確なる位置は不明なれども、福岡市東区

顯孝寺附近にありしこと確実なり)

第五代貞親は病に罹り、且つまた世子が無いので弟貞宗に第六代の家督を譲り七月十九日逝去した。この貞宗という人は深慮の人で、信仰心が厚く、寺院の創建復興に努力した。大分市上野丘の円寿寺を創建したが、古くからあった岩屋寺をここに移して建てたものらしく(豊後旧記) 大友氏の菩提寺ともなった。

また金剛宝戒寺も貞宗の創建と伝えられる。松野家々伝の大友系図によると、顯孝寺が府内(大分市)にあつ

たと誌されている。博多に貞宗の菩提寺顯孝寺が建てられたが、府内の顯孝寺が事実上移されたものか。

兄貞親が府内の蔭山万寿寺を建てたが、兄弟揃って信仰心厚く、又豊後に禪宗を受容した功績が大きい。

貞宗の時代は、二回に及ぶ蒙古戦の戦後処理が御家人の警固番役、分割相続の問題などでゆきづまり、また得宗や北条氏一門の所領が諸国の要衝をはじめ急速に増加して在地領主の不安をかき立てた時代であった。九州は勿論豊後国内でも、時代と共に北条氏一門の所領は増加して、大友氏も圧迫を受けていた。大友氏が、得宗専制や北条氏一門の権勢に気を使っていたことは、五代貞親、六代貞宗の貞の一字は、得宗北条貞時の貞の一字を拝領したものとされることから明らかである。

九州の諸將、大友、少弐、島津が北条一門を圧倒、打

倒せんとして、好機をねらった時期待の状態であった。今少し説明を加えると、後醍醐天皇の親政は永い武家政治の肌合いから歓迎されなかった。貞宗としても北条氏は打倒せねばならないが、これに代わるべき武家政権の誕生まで、たくみに時機をうかがい、或る時は菊池との盟約を破ってまで鎮西探題を擁護したかと思うと、九州有力武士と結んで北条氏の鎮西探題の滅亡をはかって宿願を達したのである。

元弘三年（一一三三）三月、戦乱の渦中で長男貞順、次男貞載二人を戦場に伴い戦死の危険があるから、幼少で家に居る五男千代松丸（七代氏泰）に大友氏の全ての所領、所職を譲って、他の子供を庶子とした。庶子には嫡子千代松丸の扶持を命ずるいわゆる、単独相続制を貞宗は断行した。従来の相続方法である分割相続では、子供に所領を分割するために、主家の財力が減り、勢力の衰微となり、大友氏が時代の変化に応じ得ないと判断したものであろう。

貞宗のこの単独相続制は当時の世相にふさわしい画期的なもので、当時の大名諸士はこの相続法を採用してゆくこととなるのである。しかし、この単独相続制によっ

て、家督に選ばれない庶子達の主家に対する抗争が生じ、南北朝動乱に複雑な影響を与えることとなるのである。

元弘三年（一一三三）五月二十五日、貞宗は戦機熟したと考え、北条氏の鎮西探題を攻めた。同時に九州九ヶ国の兵も探題攻めに加わり探題北条英時は一族三百余人と共に自殺した。

北条氏攻略に沈着に対処してきた大友貞宗も席の温まる暇とてなく、なお戦塵の漂う京都において十二月三日死去した。

元松野家々伝大友系図には、貞宗について異様なことが述べられている。

大友近江守童名孫太郎左衛門尉左近将監従五位上、母戸次太郎時親女、実は大友兵庫頭平頼泰第四子也と。貞宗は第四代親時の三男ではなく、第三代頼泰の第四子であるというのである。

又貞宗の法名である顕孝寺の旧蹟が府内（大分市）に在ったとのべてある。誰が建てたものであろうか、府内の何処に建てていたものか、今では知る由もない。

『豊鐘善鳴録』に「京都法観寺の闍提禅师正具を大友貞宗が豊後の万寿寺に聘請したが、後に筑前の顕孝寺第

一代となる。」とのべてある。『九州史学』七三号に、僅かに顕孝寺のことが誌されてある。

(1) 大友貞宗の請により闡提正具が、京都法観寺より豊後万寿寺に移錫したのは元亨元年（一一三二）から正中元年（一一三四）の間のことであろう。元亨二年四月十六日に直翁智侃が万寿寺にて示寂していることよりすれば、おそらくはこの頃であろう。

(2) 闡提正具が豊後万寿寺より筑前多々良顕孝寺へ移錫したのは元弘二年（一一三二）以前であり、したがって顕孝寺の建立も同年以前のことであろう。

以上の顕孝寺のことを整理して考えてみると、京都法観寺の傑僧闡提正具を万寿寺に招聘し、更に筑前多々良（福岡市東区多々良）に顕孝寺を建てることを思い立って、万寿寺の闡提正具を開山として派遣したものであり、或は京都から招聘した際に筑前顕孝寺建立の案が既にできていたものであろう。顕孝寺建立の目的は貞宗の菩提寺という以上に禅宗普及という大目的のためであろうか。

嘉暦元年（一一三二）貞宗が出家して具簡と号したが、この具の一字は闡提正具の一字を拝領する程、貞宗は闡

提正具に深く帰依していた関係によるもの、ように思われる。

去る三月七日、文化財研修旅行中この福岡市の多々良の地に立寄り顕孝寺を尋ねて行くと、福岡市が建てた「顕孝寺跡」の大きな説明板が目についた。「この廃寺のことは、具原益軒の筑前国統風土記に詳しい。かつて神感山と号し、闡提和尚の開山による臨濟宗の禅寺として室町時代に寺運隆盛であった。」ことが説明されていた。

寺を訪れると、松尾抱憲住職が厚くもてなしてくれ、幾つかの資料を作ってくれたり、この寺が浄土宗として出発後の後年にこしらえられたであろう闡提和尚、大友六代貞宗の位牌を持ち出して来た。拝観していると、不思議に落ちつきを感じず。具原益軒の顕孝寺の記事を紹介しておこう。当時の盛況を彷彿として想起することができる。

此寺むかしは多々良村に属せり。此寺跡は、津屋村の内となる。今の津屋も、昔多々良村に属せるなるべし。神感山と号す。禅寺にて、開山を闡提和尚と云。

本尊は釈迦仏にして、脇侍は文珠普賢なりしとかや。今は寺なくて、其のふるき跡のみ残れり。当昔は、聖福寺、承天寺にひとしき大寺にて、本堂（五間一七間）客殿（五間一七間）、鐘樓、厨、輪藏等あり。塔頭十区（略）末寺十四箇寺ありしとかや。寺領糟屋郡及筑後、豊後の内にて百町有しと云。四月八日には、絹笠四本、聖福寺より来り、八本は箱崎より持来て、仏生会を執行せしとぞ。此寺の事、建仁寺の僧仲岩円月が、東海一沕集の神山移蘭記にも記せり。円月は才学あって、文章拙からず、此寺にもすめるよし、移蘭記にも見えたり。神山に蘭草多きよししるせり。ふじばかまの事なるべし。是真蘭なり。神山は多々良のふもと、川に近きやうに記せり。今其所さだかならず。大友宗麟、耶穌宗に帰せられし時、此寺をも焼かれしかば堂舎塔頭一字も残らず。むかしはさしもの大寺なれば、大内家、大友家、小武家等の墓標此所に有しといひ伝へたれども、今は其所しれず。慶長の末に、浄土寺を此辺に立て、山号を闡提山と改む。然れども、むかしの寺院には非ず。今の寺の東なる谷を寺の内と云。是いにしへの顕孝寺の跡なり。山の上にも石礎あり。是

鐘樓の址なり。寺の内の前一町余に門の本といふ所あり。是昔の寺の門ありし所といへり。」

歴代大友氏家督の中には、その墓所明白ならざる人が幾人もおることはまことに残念なことである。六代貞宗も豊後の地をはるかに離れた筑前多々良の地に建てられた顕孝寺が菩提寺である。顕孝寺は大寺であった。要衝博多の将来を考えて建てた寺であったと思う。この大寺が、時代の變遷で、こともあろうに大友氏の兵火に焼かれて消滅してしまい、貞宗という英傑の墓所すら残されないことは、いかにも残念で痛惜してやまない。さすがは福岡市である。「顕孝寺跡」の掲示板をかゝげて道行く人に紹介を続けることに一抹のよろこびを感じずる次第である。

（つづく）

